



クラウドへ移行すべき 5つの理由

2020年末には、企業のワークロードのうち
83%がクラウドにあるとされています。
この流れに乗るべき理由をお伝えします。

目次

- 3 クラウドへ移行すべき理由トップ5
- 4 理由#1: 迅速かつリーズナブルなスケーリング
- 10 ケーススタディ: VSCO
- 11 理由#2: 収益の増加とコスト削減
- 17 クラウド移行の投資対効果 (ROI) を計算
- 20 ケーススタディ: Igloo Software
- 21 理由#3: クラウドでスピードとパフォーマンスを向上
- 26 ケーススタディ: Domino's
- 27 理由#4: クラウドで生産性を向上
- 32 ケーススタディ: Fair
- 33 理由#5: クラウドでビジネスの将来性を確保
- 39 ケーススタディ: InVision
- 40 クラウド移行戦略の計画
- 44 まとめ: 企業がクラウドへ移行すべき理由
- 46 無料のクラウド移行トライアル

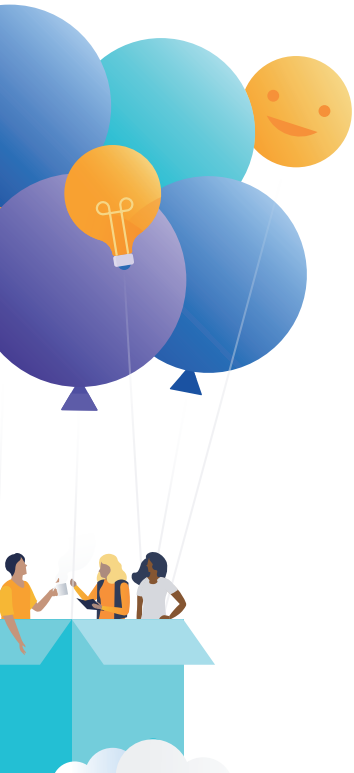
クラウドへ移行すべき5つの理由

2020年末には、企業のワークロードのうち83%がクラウドにあると、専門家は予測しています。

日頃からアンテナを張っている方であればもうおわかりでしょう。クラウドサービスは、安全性、持続可能性、機敏性に加え、費用対効果の面でもこれまでにないほどの効果を発揮しています。企業にとって、オンプレミスに留まる理由がいくつあるのでしょうか。実際、アトラシアンの新規顧客10社のうち、9社がオンプレミスよりもクラウドを選択しています。頑なに従来の方法を好んでいたユーザーでさえ、クラウドへの移行を開始しています。

一体なぜ、これほどまでにクラウドへの移行が進んでいるのでしょうか。また、移行を開始していない企業はすでに後れをとっていると専門家はいますが、その理由はどこにあるのでしょうか。

企業におけるクラウド移行の理由トップ5を以下に挙げ、この問いにお答えします。



- ① 迅速かつリーズナブルなスケーリング
- ② 収益の増加とコスト削減
- ③ スピードとパフォーマンスの向上
- ④ チームの生産性向上
- ⑤ 将来に有効な競争力



理由 #1

迅速かつリーズナブルなクラウドのスケールング

「scale your business (事業の拡大)」と Google で検索すれば、表示される検索結果件数は 20 億近くにもなります。

この件数を意外だと感じる人は、実際のところあまりいないのではないのでしょうか。それこそが何よりも驚くべきことです。このテーマがなぜこんなにも注目を集めるのかといえば、今日、規模の大小を問わずほとんどの企業が成長を目指しているからにほかなりません。顧客数を増やし、顧客が持つ課題を次々と解決することで、収益の増加につなげたいと強く願っているのです。短期間で自社製品のユーザーが倍増するようなことがあると、私たちはそれを大成功だと考えます。ある企業が目標の 200% を達成した、あるいは数ヶ月のうちにチームを 4 倍にまで成長させたというサクセスストーリーを耳にすると、誰もが心を奪われます。多くのビジネスパーソンは、常に事業のスケールアップについて考えを巡らせているのです。

ところが、急速な成長を思い描く時つい忘れがちなことがあります。短期間で成功を収めるために欠かすことのできないもの——それはスケラブルなテクノロジーです。これがなければ、成長を加速させたとしてもすぐに崩壊してしまいます。ユーザーが倍増すれば嬉しい限りですが、支えとなるテクノロジーがなければ重大なインシデントを引き起こしかねません。顧客の満足を得られないばかりか、チームはストレスで疲れ切ってしまうでしょう。

つまり、顧客からの注目度を急上昇させる、素晴らしい製品を作る、成長に突き進む文化を醸成するといったことだけでは不十分で、迅速でスマートかつ、リーズナブルにスケーリングできるテクノロジーが必要不可欠なのです。また、顧客やチームのニーズにタイムリーに対応するには、必要に応じてスケールイン、スケールアウト、スケールアップ、スケールダウンするなど、システムにも柔軟性が求められます。

成長を遂げようとする時に、テクノロジー面で大きな問題を抱えたくはないでしょう。クラウドテクノロジーなら、オンプレミスサーバーよりも迅速でスマートかつ、リーズナブルにスケーリングが可能であり、その差は歴然としています。

簡単にいえば、フレキシブルかつ応答性の高いテクノロジースタックが、常に手の届く場所にあるということになります。時間も費用もかかる手動アップグレードは必要ありません。

スケーラビリティとは

スケーラビリティとは、利用できる処理能力やサーバースペース、あるいはリソースを、ビジネスニーズに応じて拡大、縮小できる度合いを示すことばです。

例えば処理能力を上げたい時、そのニーズを満たすためにサーバーのキャパシティをスケールアップします。午前2時から4時の間は処理能力を下げたいとなれば、この時間帯だけサーバーをスケールダウンし、リソースの使用量およびコストを削減することができます。



クラウドとオンプレミスでスケーリングを比較

スケーリングで軍配が上がるのはクラウドです。オンプレミスでは、スケーリングに際してリソースが限られているからです。ユーザー基盤が拡大する中、システムを円滑に運用し続けなければならない状況があるとしましょう。CPUやメモリを強化することで既存のマシンの処理能力を高める垂直スケーリング、あるいはサーバーやマシンを増やす水平スケーリングのいずれかを選択をすることになります。



オンプレミスでは物理的なリソースに限界があるといわれますが、その理由は、垂直スケーリングでも水平スケーリングでも、人の手によって行われるためです。IT部門はマネジメントと調達部門による承認のもとサーバーを注文し、アップグレードに際してはマシンをオフラインにしなければなりません。サーバーにかかる負荷を分散するため、ロードバランサーを購入してセットアップする必要があります。単一サーバーにおける過負荷状態や速度の低下、あるいはシステムの停止といった事態を回避するためです。こうしたプロセスを踏むには時間や費用がかかります。事前に計画を立てる必要があるため、迅速なスケーリングは難しいでしょう。

一方、クラウドに移行してからスケーリングを行う場合、オンプレミスで踏んだ手動のステップは一切ありません。クラウドシステムでも、垂直スケーリングや水平スケーリングが可能である点はオンプレミスと同じです。しかし、追加の処理能力、サーバー、マシンなどのリソースがすでに用意されているため、時間も費用もかかる承認などのスケーリングのプロセスを経る必要がありません。

クラウドにおけるスケーリングでは、推測に頼る必要もありません。オンプレミスでは、必要な処理能力やサーバー台数を決めるにあたり、ITチームが妥当な数量を推測することになります。多く見積もり過ぎてしまうと、使わないリソースに対して代金を支払うことになります。少なく見積もってしまった場合は、時間と費用をかけて再度手動アップグレードを行わなければならない、その前に幾度もの内部承認を経る必要があります。一度の追加作業では終わらない可能性もあるのです。いうまでもないことですが、トラフィックの急増は速度の低下を招き、顧客離れが起こるだけでなく、重大なインシデントを引き起こす場合もあります。Facebookは、こうしたインシデントで推定9,000万ドルを失いました。

多くのクラウドソリューションで、スケーリングは自動で行われます。WIREDの誌面で自社製品の特集が生まれ、一夜にしてユーザーが2倍あるいは3倍に増えたとしましょう。システムはその需要に応えるべくアップグレードされます。ビジネスで使われていたに過ぎないサービスが、ある日突然世界の誰もが知るサービスに変貌を遂げる——あなたにも起こり得ることです。Zoomはまさに、世界でそうした現象を巻き起こしました。執筆グループや結婚式、それにおばあちゃんが開くビンゴ大会まで、人々はあらゆるイベントにアクセスできるようになり、Zoomは3,000%という驚異的な成長を経験しました。クラウドではこうした局面に対処する準備ができています。

一方で、予期せぬ事態から処理能力を落とさなければならない場合、システムはスケールダウンし、費用も使用した分だけに抑えられます。

オートスケールをお望みでなければ、別の選択肢をご用意しています

クラウドを採用する企業はほとんどの場合オートスケールを選択し、必要に応じてリアルタイムでスケーリングが行われるようにします。しかし、より多くを手動で制御できるクラウドシステムを選ぶことももちろん可能です。



オンプレミス vs. クラウドスケーリングオプション

オンプレミスのスケーリング

1. ニーズを特定
2. 追加リソースを申請
3. ニーズに応じて水平スケーリングまたは垂直スケーリングを決定
4. 必要な追加リソース数を計算
5. 承認プロセス(複数のチーム、経営陣+財務判断を伴う場合がある)
6. 承認
7. 新しいリソースを購入
8. 新しいリソースをインストール

ダウンタイムの可能性、コスト平均5,600ドル/分

自動クラウドスケーリング

1. 自動(システムが動的に反応)

クラウドでの手動スケーリング

1. ニーズを特定
2. リソースを申請
3. 承認プロセス
4. 業者へ連絡

スケジュールに基づくクラウドスケーリング

1. 事前に計画を作成
2. 履歴/計画的利用の見直し
3. ピーク/ロータイムを特定
4. 業者と計画策定

* 予期せぬ急増や低下は考慮されていない。

クラウドでの手動スケーリングは、手動ではあるものの、オンプレミスよりもプロセスがシンプルです。追加リソースの申請から始まり、申請内容の検証と承認を経て購入、そのあとようやく設定に入るというオンプレミスの長いプロセスに比べ、クラウドではボタンを押すだけです。

オートスケーリングが圧倒的に選ばれる理由でもある手動スケーリングのデメリットとは、人による操作を必要とするため、突如短時間でスケーリングが必要になった場合に遅れが生じてしまうという点です。また、担当者が需要の増加に合わせてスケールアップしたあと、元に戻すことを忘れやすいという点もあります。繰り返しになりますが、このような場合は使用していないリソースに対して代金を支払うこととなります。

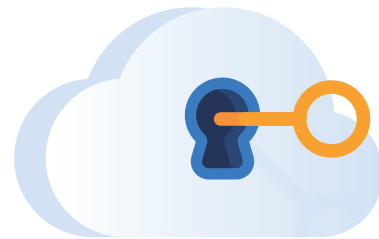
クラウドでのスケーリングには、**スケジュールに基づくスケーリング**という選択肢もあります。ニーズに対応して自動でスケーリングされるわけではなく、ピーク時と利用が少ない時間帯をあらかじめ予測しておき、それぞれのタイミングで拡大・縮小されるよう設定しておくというものです。ニーズの傾向が一貫している場合はうまく機能するかもしれませんが、それでも需要が予期せぬ急増や低下を見せた場合、それに対応できる余地はありません。



クラウドでスケーリングを効果的に行うためには、これに適したテクノロジーが必要です。ただし、自社のプロセスやチーム、企業風土も整備する必要があります。こうした理由から本ガイドは、クラウドで急成長を目指すにあたっての課題、そしてベストプラクティスを網羅するべく作成されております。

クラウドでのスケーリングで安全性を維持

なぜクラウドへの移行に躊躇するのか、オンプレミスを維持している企業に聞いてみましょう。その答えとして恐らく最初に耳にするのは、セキュリティへの懸念です。ところが、調査に応じた企業のうち94%が、クラウドへ移行したあとセキュリティが向上したと回答しました。これは朗報であり、セキュリティリスクへの懸念が全く時代にそぐわないことがわかります。



クラウドでのスケーリングでは、どのように安全が維持されるのでしょうか。数あるベストプラクティスの中でも、厳格なセキュリティテスト、災害復旧計画、そして転送中および保存時の暗号化にその答えがあります。いうまでもありませんが、クラウドは最初のアクセスポイントだけではなく、個々のユーザーレベルでシステムを保護しています。ユーザーのログイン方法、アクセス権やその有効期限を管理することで、急成長の最中であってもセキュリティリスクが軽減されます。

また、優れたクラウドシステムはセキュリティにゼロトラスト型のアプローチを採用しています。あらゆるエンドポイント、そしてあらゆる社内ユーザーに対し、セキュリティチェックを行うというものです。

ゼロトラスト型のアプローチを採用する理由はシンプルです。オンプレミスのサーバーは通常、全社的に利用するVPNにより保護されています。しかし一度VPNに侵入されてしまうと、システムやツール、そして保存データも、もはやあらゆるものにアクセスを許すことになり、パニック状態は免れません。同様に、ユーザー全員のアクセスできるセキュリティレベルが同じ場合、大損害につながる可能性があります。誰かのログイン情報さえあれば容易に侵入できるからです。

クラウドシステムのセキュリティは、システムの周囲を掘で囲うのではなく、重複しないログイン情報を設定した上で度々チェックポイントを設けるかたちをとっています。システムがIDやデバイスの資格情報をチェックし、各ツール間でセキュリティゲートの役割を果たすことで安全性を確保しています。各ツールが独自の安全領域を形成しており、1つのツールにアクセスできたからといって、ほかのツールへもアクセスできるということにはなりません。各ユーザーにはそれぞれ異なる権限が与えられているため、システムにログインしてもその全てにアクセスできるわけではないということです。

一部のシステムに脆弱性が存在していたり、不正なログインがあったりしたとしても、このような方法でほかのシステムに危険が及ばないようにしています。クラウドへの移行に際し、圧倒的多数の企業がセキュリティの向上を感じ、安心感を得ている理由がここにあるのではないのでしょうか。

ケーススタディ：VSCO

クラウドの迅速かつリーズナブルなスケーラビリティにより、本当に変化がもたらされるのでしょうか。VSCOの写真コミュニティに聞いてみれば、明確な「Yes」が返ってくるでしょう。

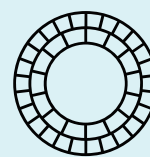
VSCOは、写真編集アプリから200万ユーザーを擁する活況なサブスクリプションビジネスへと移行し、一足飛びに成長したように見えます。サービスの中断を伴わない素早いスケーリングに注力したいと考え、Atlassian Cloudを採用してスーパーマンさながらの飛躍を実現しました。

“移行を決めた第一の理由は、メンテナンスの容易さでした。200万のユーザーに対し、価値を提供することに集中したいと強く思っていたのです。しかし社内ツールというものは、クリエイティビティに恋する人々をサポートするという弊社のミッションに、直接貢献するものではありません。そうしたツールのアップグレードに時間をかけているわけにはいかないのです。

クラウドへの移行を主導したパワーユーザーとして、技術製品管理本部長(Director of Technical Product Management)のSky Frostenson氏は以上のように述べました。

つまり、サーバーのアップグレード、ロードバランサーの購入、長々とした承認プロセスといった業務に、ITチームの貴重な時間を使うべきではないということです。全てITチームから完全に切り離して問題ありません。むしろその方がうまく機能するでしょう。

Atlassian Cloudを採用し、パフォーマンスも稼働も安定していると、Sky氏は話します。サービスアップグレードやダウンタイムが定期的には発生していましたが、今ではほとんどなくなりました。ITチームはサーバーのアップグレードではなく、戦略的なタスクにエネルギーを注いでいます。クラウドのUIについても、見やすくフレキシブルだという声が届いています。



VSCO

業界

テクノロジー

場所

カリフォルニア州オークランド

企業規模

従業員500名未満

製品

Jira Software Cloud
Confluence Cloud
Jira Service Management Cloud
Trello

Marketplaceアプリ

Easy Agile Roadmaps for Jira
Zendesk Support for Jira



理由 #2

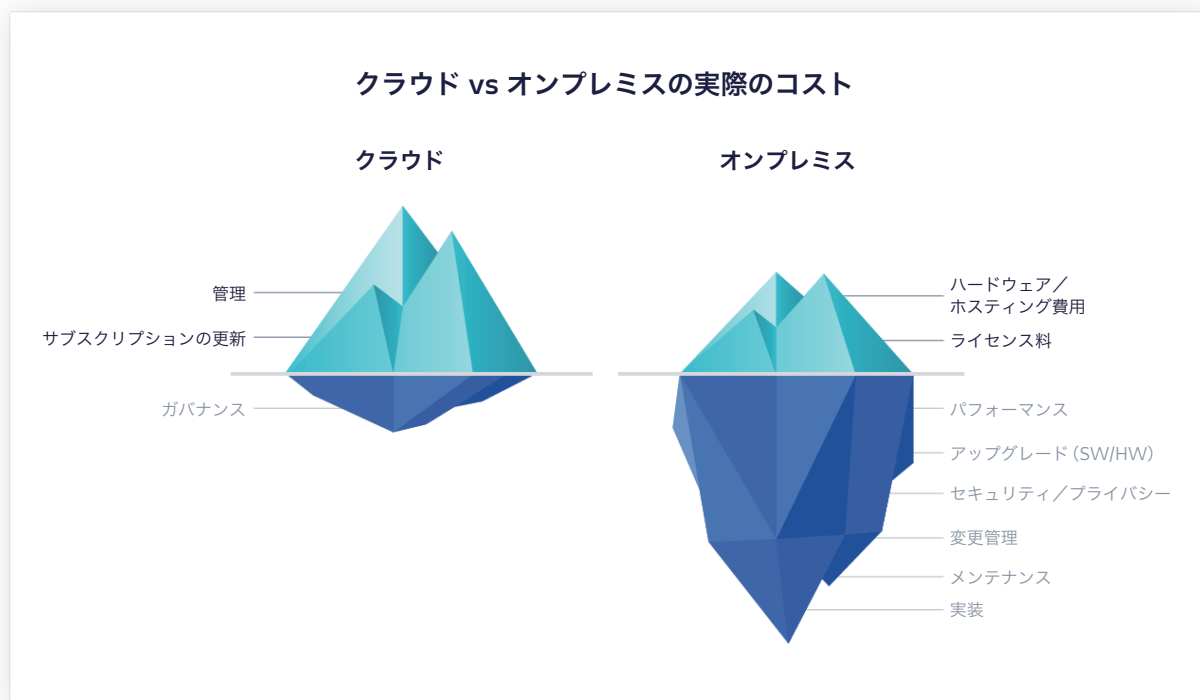
クラウドで収益を増加し管理コストを削減

ツールをオンプレミスでホストする場合とクラウドを使用する場合、かかる費用はどちらが高いでしょうか。こう質問すれば十人十色の答えが返ってくるでしょう。企業はこの問いをシンプルなものだと思いがちですが、実際は相当に複雑です。

月々クラウドに支払うサブスクリプション費用とライセンスコストとを比較すると、クラウドの方が高く感じられることが多いはずです。オンプレミスからの移行にかかる費用も併せて勘案すると、クラウドは必ずといってよいほど高額な短期投資とみなされます。しかし長期的な価値を考えた時、オンプレミスは安定的な選択肢というよりむしろ、コストがかかり続ける選択のように見えます。

なぜでしょうか。その理由は、氷山の一角といえはわかりやすいでしょうか。オンプレミスにかかる費用は一部を除いて見えづらく、実際は思ったよりもコストがかかっているのです。

システムがダウンすると、それが数分から数時間程度であっても、そのコストはクラウドのサブスクリプション年間費用の3倍にまで上る可能性があります。オンプレミスから脱却すれば、ITにかかる時間やリソースを半分程度に削減することも可能です。しかも、オンプレミスを採用していれば大抵はその影響を受ける運用コストやリソースのオーバープロビジョニングについては、この計算に入れていません。



35,000台のサーバーを対象にした最近の調査で、クラウドへ移行してサーバー規模の適正化を図れば、年間平均30%のコスト削減が実現すると報告されています。ライセンスがあるものの使用していないソフトウェアについては、かかる費用が米国と英国を合わせて実に年間340億ドルにまで上っています。また、Office 365による報告書では、オンプレミスから脱却すると全体で平均20%のコストが削減できるとされています。

さて、ここで問題となるのは何がより安いかではありません。長期的視野を持つか短期的に考えるかという問いに答えを出す必要があります。目に見えやすい初期費用だけで比較しますか？あるいは大局を見て、ITチームの労働時間からサーバーの交換まで全てを勘案し、総所有コストを計算しますか？氷山の一角を思い出してみましよう。長期的に見て費用の削減に寄与するのがなぜクラウドなのか、その理由はいくつもあります。ここではそのうち5つを挙げ、氷山の隠れた部分にあたるコストをクラウドでどのように削減できるのか見ていきましょう。

重大なインシデントへの対応コストを削減、あるいはゼロに

Gartnerによる2014年の調査では、企業がダウンタイム1分あたりにかける費用は平均5,600ドルだとされています。そして2014年以降、この数字は増加の一途をたどり、のちのレポートでは9,000ドル程度まで上がりました。

もちろんこれはあくまで平均値で、企業によってはさらに多額の損失を出しています。Facebookは2019年、サービスが14時間に渡ってダウンし、これによって9,000万ドルを失ったと推定されています。



オンプレミスでは、ダウンタイムが発生するとその負担は直接ITチームにのしかかります。また、収益や社内の生産性に影響が出るのはもちろん、SLAに準拠できずペナルティが発生するほか、残業や緊急待機に対して手当を支払うなど、様々なかたちで負荷が発生することになります。

こうした事実を知ることは、コスト削減を目的にクラウドへの移行を決断する1つのきっかけになるのではないのでしょうか。システムの稼働を自社のITチームに依存し、重大なインシデントの処理も自社のサーバーとシステムに頼るという状況を脱し、こうした責務をクラウドベンダーにアウトソースするのです。例えば、アトラシアンは99.95%の稼働率を保証しており、インシデント発生時には迅速に解決できるようリソースを確保しています。これには追加料金もかかりません。

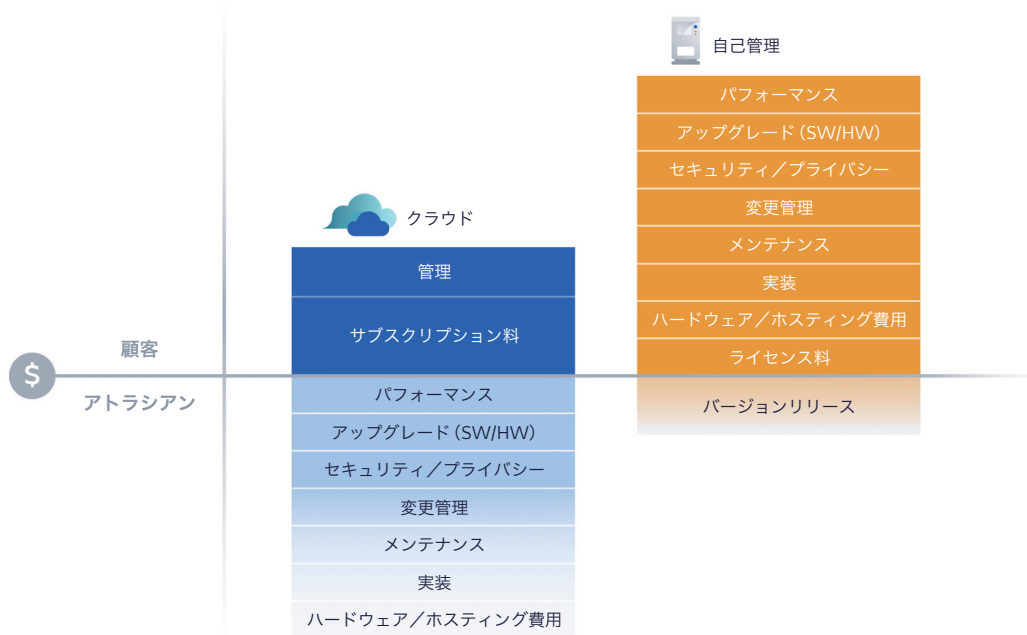
重大なインシデントにどのように対応するか、解決法や事例についてについてご関心をお持ちですか？ 詳細については、アトラシアンのソリューションパートナーまでお問い合わせください。

ITチームの時間を解放—タイムイズマネー

オンプレミスでサーバーを管理するとなると、ITチームにはどれだけの業務が発生するのでしょうか。パフォーマンスのアップグレード、定期アップグレード、セキュリティパッチの適用、サーバーの交換、リモートアクセス用VPNの設定、インシデント管理、変更管理、マニュアルインテグレーションなど、タスクのリストは瞬く間に長くなります。

クラウドに切り替えれば、こうしたタスクは全て、ベンダーがそのまま担うことになります。ベンダーはセキュリティのアップグレードやサーバーのメンテナンスを行うほか、テクノロジーが古くなれば新たなものに置き換えます。また、ソフトウェアを定期的にアップグレードし、機能面のリクエストやバグにも対応します。

総所有コスト： クラウドと自己管理コストの比較



傾向として、IT人材の給与水準は最高レベルにあります。つまりクラウドに切り替えると、そうした人材の集まるチームが煩わしい作業に縛られることなく、戦略的あるいは緊急のタスクに集中することができるのです。74%もの企業がクラウドによって競争上の優位性が生まれたと話すのも、このような理由からです。



運用コストおよび物理的コストを削減

運用コストや物理的コストについても、オンプレミスには見えない部分が多くあります。いずれもクラウドであれば発生すらしらないものです。その例として以下をご覧ください。



サーバー

平均的な寿命は3～5年で、定期的に修理や交換が必要となります。



サーバーサポート

ロードバランサー、温度調節計、サーバーラック、交換用部品など、オンプレミスではサーバーそのものに加え、周辺機器も揃える必要があります。ハードウェアや部品といった物的資産も、一定間隔で購入やメンテナンス、交換が欠かせません。



ソフトウェアの更新と余剰分も含む ライセンス管理

企業で余分なライセンスに支払われている費用が、米国と英国を合わせると年間約340億ドルにまで上ると、ある調査で報告されています。必要なソフトウェアの数を正確に把握するか、あるいはクラウドへ移行すれば、こうしたありがちな落とし穴を回避することができます。クラウドでは、ソフトウェアのユーザー数が度々自動的に追跡・更新され、管理者はそれを確認することができます。



電気料金

80%ものサーバーがオーバードプロビジョニングされているとすると、オンプレミスを採用している企業のうち80%が、必要以上の電力を使用しているということになります。つまり、本来支払わなくてよい電気代を支払っているのです。



不動産とスペース

物理サーバーは物理的なスペースを必要とします。クラウドへ移行すれば、今あるスペースをほかの用途に開放するか、あるいはデータセンター用に確保している不動産の費用を、予算から完全に除くことができます。



メンテナンス

サーバーメンテナンスに際しては、臨時に人を雇用するか、業者へ作業を委託して対応する場合がほとんどです。これもクラウドベンダーへ一任しておけば予算から消すことのできる項目です。



資産管理の時間と監査

物理サーバー、ロードバランサー、部品に加え、ソフトウェアライセンスやデータベースといった無形資産など、ITチームで管理する資産が多いほど、資産管理で追跡すべきものが多くなります。多くの時間やリソースを必要とするだけでなく、精神的にも負担となります。

環境コストを削減

多くの人が環境により優しくありたいと考えていますが、なぜかといえばそれが正しいことだからにほかなりません。オンプレミスとクラウドを比較する時、クラウドはリーズナブルで環境に優しい選択です。これは思わぬ朗報ではないでしょうか。

その理由はもちろん、電気に費用がかかるからです。必要以上に電気を使えば、必然的にコストもかさみます。クラウドはオンプレミスに比べて最大98%エコフレンドリーだとされていますが、同時により安価な選択肢でもあるのです。

スケーリングの負荷を軽減

オンプレミスのリソースは、80%という圧倒的な割合でオーバースペルジョニングされています。つまり、企業は必要量をはるかに超える処理能力に支出しているのです。こうした企業が自動でスケーリングを行うクラウドサービスに移行すれば、年間30%もの費用を削減できるということが、TSO Logicの調査で明らかになっています。

オンプレミスでホスティングする場合に問題となるのが、処理能力をどの程度必要とするかを、ITチームが経験に基づいて判断しなければならないという点です。過大に見積もってしまった場合、サーバー、ロードバランサー、電力を含め、必要のないリソースに費用をかけることになります。

一方、過少に見積もってしまうと、コストをかけて手動でスケーリングするという長いプロセスが待ち受けています。需要を満たすにはサーバーの台数を増やすか、あるいは処理能力を上げなければなりません。いずれにしても費用とマンパワーが必要です。月単位の時間はかからないとしても、数週間に渡ってサービスが遅い、あるいは使えないとなれば、いうまでもなく収益や顧客のロイヤルティに影響が及びます。見積もりが外れた場合は、それが過大であっても過少であっても、最終利益に大きなインパクトを与えかねません。

ここでのソリューションは、オートスケールの選択肢があるクラウドサービスを採用することです。使用量が急増すれば、その需要を満たすよう処理能力が上がります。使用量が減るとスケールダウンするため、コストを削減することができます。

クラウド移行のコストを計算

次の式を用いれば、クラウド移行などの投資対効果 (ROI) を最もシンプルに計算することができます。

$$(\text{投資損益} - \text{投資額}) \div (\text{投資額}) = \text{ROI}$$

例えば、オンプレミスからクラウドへの移行に50,000ドルを投資し、移行後に年間で得られる利益、あるいは削減できる金額も50,000ドルだとしましょう。3年後を想定してこの式に当てはめると、以下ようになります。

$$(\$150,000 - \$50,000 = \$100,000) \div (\$50,000) = 2$$

この例では、3年間のROIが2倍 (200%) ということになります。1年目では利益が出ませんが、2年後3年後には本当の利益が生まれ始めます。

さて、こうした計算をする際、1年あるいは2年という期間を対象とする方が理にかなっている場合もあります。しかし、**クラウドによって削減できる金額は、多くの場合時間が経つほど大きくなるのです**。移行に伴う費用は、最初の段階で一度だけ発生します。一方で、サーバーやソフトウェア、ITタスク、業務委託に係る削減効果は、一般的に年単位で発揮されます。つまり、ROIは時間の経過とともに右肩上がり伸びる傾向があり、数年間のスパンで計算しなければ、実際にいくら削減できているかを把握できない場合も多いのです。

別の例を見てみましょう。オンプレミスからクラウドへの移行に60,000ドルを投資し、削減できる運用コストが年間45,000ドルだとします。移行時に一度発生する先行投資が、1年目に削減できるコストを上回っているため1年目のROIはマイナスです。しかし、計算対象を3年あるいは5年と広げていくと、削減できる金額が劇的に上がっていくのです。

3年後、利益が投資を上回ります。5年目には、投資額の3倍に迫る利益を生んでいるはずで

例

1年間のROIを計算する場合

- クラウド移行から得る利益：年間削減額 \$45,000
- 移行に伴う投資：\$60,000
- 1年間のROI： $(\$45,000 - \$60,000 = -\$15,000) / 60,000 = -25\% \text{ ROI}$

3年間のROIを計算する場合

- クラウド移行から得る利益：年間削減額 \$45,000 × 3年 = \$135,000
- 移行に伴う投資：\$60,000
- 3年間のROI： $(\$135,000 - \$60,000 = \$75,000) / 60,000 = 125\% \text{ ROI}$

5年間のROIを計算する場合

- 移行から得る利益：年間削減額 \$45,000 × 5年 = \$225,000
- 移行に伴う投資：\$60,000
- 5年間のROI： $(\$225,000 - \$60,000 = \$165,000) / 60,000 = 275\% \text{ ROI}$

数年後までを見据えてテクノロジーに投資する組織は、長年に渡って優れた競争優位性を維持する傾向があり、多くの場合大きなリターンを得ています。



投資額と利益の計算

前述の式を使ってROIを求めるには2つの値が必要ですが、計算には注意を払わなければなりません。オンプレミスからクラウドへ移行する際の**初期投資額**を把握するには、専門家によるサービス、社内のリソース、ソフトウェアのライセンス、データの移行、クラウドのサブスクリプション、そしてオンプレミスのツールと異なる場合は必要なクラウドツールに関する再トレーニングなど、この時点でかかる費用をコストとして計上する必要があります。

そして**利益**を算出する時は、ハードウェア、ソフトウェアのライセンス、電気、サーバールームやデータセンターを始めとする不動産関連、メンテナンスにかかる従業員の労働時間や業務委託費用、資産・インシデント・変更管理にかかる時間、セキュリティアップグレード、機能アップグレード、そしてITチームにおける労働時間や必要人員の減少分も、削減できた費用として計算に入れます。

切り替え前には計算が難しいものの、重要性の高い要素があります。ダウンタイムのコスト、パフォーマンスの向上による利益、IT以外のチームで削減できた時間です。例え年間1時間程度であっても、ダウンタイムが減ればコスト削減効果は数十万ドルにもなり得ます。IT以外のチームでも、新しい機能に素早くアクセスできれば、その分生産性やセキュリティが向上し、コラボレーションの促進も期待できます。

移行へ向けて何から計画すべきでしょうか？

クラウドへの移行に関して、どのような方法をとるのがベストなのか専門家へ相談したい、インスタンスを統合する方法を知りたい、あるいはカスタムAPIを構築する必要があるといった場合は、アトラシアンソリューションパートナーまでお問い合わせください。



ケーススタディ：Igloo Software

大規模なシステムダウンを経験し、これによる損失はJira Cloudサブスクリプション費用の3倍に上りました。この出来事のあと、Igloo Softwareはオンプレミスからクラウドに切り替える決断を下しました。これにより、将来起こり得る重大なインシデントに対してだけでなく、管理業務にかかる時間や定期的なダウンタイムにおいても、大きなコストダウンが実現しました。

シニアツール管理者のJames Seddon氏は以下のように述べています。

“サーバー製品のJiraを自社で管理していた頃は、アップグレードの度に少なくとも2時間のダウンタイムが必要でした。アップグレードを行うのは午後8時以降でなければならず、管理者である私は夜遅くまで働かなければなりません。BambooとBitbucketについても個別にアップグレードを行っていましたが、これにもそれぞれ最短2時間かかっていました。

時間の節約、すなわちコストの削減に寄与するとしてSeddon氏が強調するもう1つの要素は、ユーザーが自分で機能の設定を行えるという点です。管理者の助けは必要ありません。ユーザー自身で対応できる管理タスクが各段に増えたため、クラウドへの切り替え以降、サポートチケットの数は50%も減少しました。

IGLOO

業界

テクノロジー

場所

カナダ、オンタリオ州

企業規模

500名未満

製品

Jira Software Cloud
Confluence Cloud
Jira Service Management Cloud
Atlassian Access



理由 #3



クラウドでスピードとパフォーマンスを向上

42%の専門家が、クラウドに移行する理由トップ5にネットワークパフォーマンスを挙げています。会社の規模が大きいほど、ネットワークパフォーマンスは重要な問題です。実際、従業員数が1,000人を超える企業を対象に行われた調査では、76%のリーダーがITサービスのスピードアップを目的としてクラウドを採用したと答えています。

一体なぜ、クラウドによってビジネスが加速するのでしょうか。主な理由を6つご説明します。

優れたネットワークパフォーマンス

2019年、企業がクラウドの採用を決めた理由をINAPが調査したところ、ネットワークパフォーマンスが第1位となりました。(2018年は3位)

パフォーマンスが上位に躍り出た原因はどこにあるのでしょうか。驚かれるかもしれませんが、その理由は顧客維持にあります。確かに、ITチームだけがパフォーマンスの影響を受けるわけではありません。システムのパフォーマンスが悪ければ、顧客を失う可能性も高まるでしょう。新規顧客の獲得にかかるコストは、既存顧客の維持に比べて5～25倍高いとされています。つまりネットワークパフォーマンスは、最終利益に直接影響する要素なのです。

アップタイム保証

料金に見合う仕事をするクラウドプロバイダーであれば、アップタイム保証を行い、システムが停止する不安を払拭してくれるでしょう。

Atlassian CloudのPremiumプランは、SLAで99.9%のアップタイムを保証しており、これを下回った場合にはサービスクレジットによる返金を行います。Cloud Enterpriseプランでは、返金保証付きのアップタイムSLAを99.95%まで引き上げています。どちらのプランにも年中無休のサポートがついており、お問い合わせいただいた場合は1時間以内に対応します。

“ Atlassian Cloudを利用していれば、データセンターでノードがダウンし、夜中に起きなければならないといった事態に陥る心配がありません。考え得る限りで最高のSLAは、私だけでなく顧客にも大きなメリットをもたらしています。

LAURENT BORDIER氏

Lucid Motors、アトラシアン製品管理担当

パフォーマンスの自動アップグレード

自動アップグレードでは、手動のプロセスが一切入らないためタイムリーなパフォーマンス向上が可能です。アクセスするツールは常に最高の状態に保たれており、競合他社に後れをとることがありません。

迅速な製品開発とデプロイメント

スピードが重要な部門において、クラウドがオンプレミスより優れているといえる点がほかにもあります。開発者がその日に行った作業を同期する**継続的インテグレーション (CI)** と、ソフトウェアへの小さな変更を素早くかつ定期的にデプロイする**継続的デリバリー (CD)** です。

CIおよびCDは、DevOpsの視点からもアジャイル開発においてもベストプラクティスとされており、開発チームによって広く採用されている手法です。CIの主なメリットは、デプロイに向けてスピードおよび整合性の向上を図れることにあります。CDは、変更を迅速にユーザーへ届けられるほか、小さなバッチで処理するため、インシデントが起きた場合でも容易にダイヤルバックできる点が主なメリットです。

さて、これがクラウドへの移行とどう関係しているのでしょうか。CIやCDはオンプレミスでも可能ですが、大抵の場合、スピードでもシンプルさでもクラウドが勝ります。リモートワークや分散型のチームが機能するのも、クラウドだからこそです。何にせよ、クラウドを使えば必要なマシンに迅速にアクセスし、必要な処理能力を素早く得ることができるため、CIやCDといったタスクを同時に行うことが可能となります。こうした重要な業務において、大幅なスピードアップが実現するのです。いうまでもなく、CIやCDに使うソフトウェアはそのほとんどがクラウドベースであり、ほかのクラウドツールともシームレスに統合することができます。

オートスケールとロードバランシング

オンプレミスの場合、処理能力には常に限界があります。サーバーやロードバランサーの数が決まっているため、これに伴って処理能力の上限も決まるからです。ユーザー基盤が急速に、あるいは予想外に大きくなると、システムのスピードが落ち、場合によっては一気にダウンしてしまうかもしれません。

クラウドのオートスケールはニーズに合わせて処理能力をスケールアップするため、ユーザーが予想外に急増したとしても対処することができます。ですから、社外のユーザー基盤が一晩で4倍に増えても、あるいは新たな需要に応えるために社内のチームを一週間で倍のサイズにする必要があっても、スピードが損なわれることはありません。

標準化

ツールそのものだけでなくツールの外側にも目を向けながら、クラウドへの移行を社内プロセス合理化の機会として利用しているチームも存在します。スピードと生産性を向上させるにあたり、業務のプロセスやチームの文化にも切り込むチャンスだと考えているのです。

新しい家への引っ越しは、あるもの全てに目を通し、不要なもの——例えば、足に合わずクローゼットの奥にしまったままの靴や、よかれと思って買ったものの一切使っていないゴルフクラブなどを捨てる機会となるでしょう。クラウドへの移行もこれとよく似ており、インスタンス、ワークフロー、ドキュメンテーション、チームのベストプラクティスなどをじっくりと精査し、事業の全体目標を目指すにあたって糧となっているものとそうでないものを仕分けるよい口実になるといえます。

オンプレミスからクラウドへの切り替え

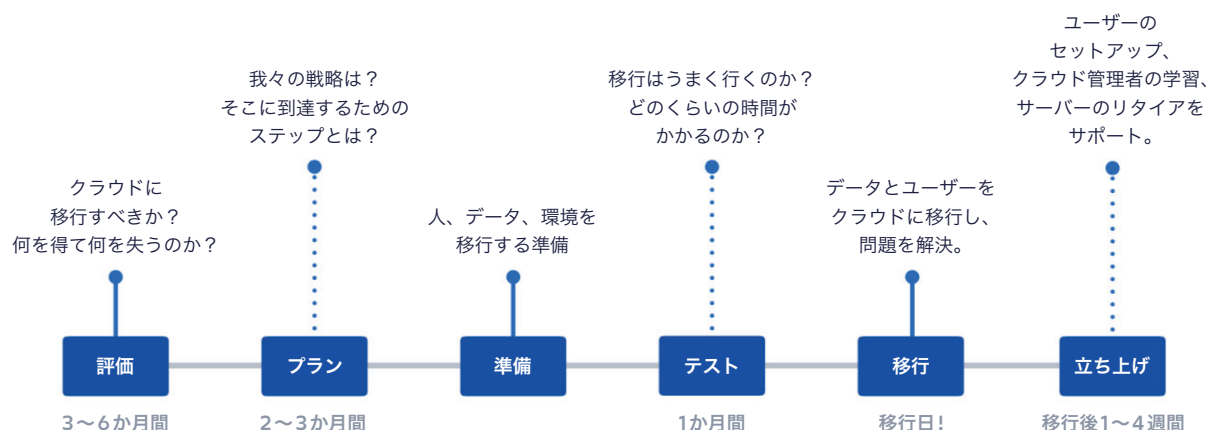
総合的に考えて、パフォーマンス、製品開発、そして社内プロセスのスピードも、クラウドへの移行によって向上が期待できそうです。とはいえ、**オンプレミスからクラウドへの移行そのものについては、必ずしも速く進むとは限りません。**

単純にスイッチを切り替えるような感覚で移行できるという話も広く聞かれますが、それはシンプルに考え過ぎです。実際のところ移行には時間がかかりますし、よい結果を求めるなら**計画を立てる必要もあります。**

資産をクラウドへ移行するにあたっては、アプリケーションをテストし、帯域幅の制限について検討し、移行作業に相応しいリソースを社内外から割り当てる必要があります。こうしたアクションをどのようなスケジュールで進めるかについては、組織の規模やシステムの構成状況によって大きく異なります。

所有するサーバーが1台のみ、かつシステムの統合などをしていない小さな企業であれば、1週間から数週間容易に切り替えができるでしょう。しかし、これは最速の場合です。メールを統合し、ドキュメントリポジトリを持ち、コミュニケーションツールを使用するなど、多くの企業は複雑な仕組みで動いています。組織規模が大きければ大きいほど、そしてシステムが統合されていけばいるほど、移行にかかる期間も長くなることが予想されます。業界的には2〜3ヵ月程度が平均的ですが、複雑なシステムを持つ大企業の場合、着手してからクラウドでの業務開始およびトレーニングに至るまで、最大12ヵ月かかることもあります。

大規模なクラウド移行の推定スケジュール



さて、今お伝えしたのは移行プロセスの中でもあくまで技術面の話です。システムの移行が終わったあと、従業員をトレーニングし、文化の面でもチームとしても新しいシステム上で連携できるようになるまでの時間を考慮しておくことが大切です。社内のドキュメントの更新、ワークフローや業務プロセスにおける変更点の反映、アップデートされたシステムでのタスクの完了にかかる時間も同様です。

ここで重要なことは、**クラウドでスピードアップやコストの削減を図るにあたっては、長期的な視点を持たなければならない**ということです。高い機敏性と費用対効果が感じられるポイントへ辿り着くまでには、時間の面でも費用の面でも先行投資が必要なのです。組織の規模が大きいほど、この期間も長くなる傾向にあります。

クラウドへの移行から期待できるのは、**長期的価値である**という点を理解することが大切です。**76%の企業リーダーが、クラウドを採用する目的としてITサービスのスピードアップを挙げている**のはこのためです。短期的にかかる労力よりも、長期的な利益の方が重要なのです。



ケーススタディ：Domino's

速いスピードが求められるものがこの世に2つあるとしたら、それは宅配ピザとDevOpsのプロセスです。Domino'sは、その両面で成功を手に入れました。

Atlassian Cloud Premiumを採用する前は、この宅配ピザ業界のビッグチェーンも問題を抱えていました。DevOpsのワークフローでスピードが低下していたのです。

原因は何だったのでしょうか？ セキュリティです。技術面の変更を加える際、承認をとるためのミーティングやレビューに20時間以上を費やしていました。競争力を維持するためには、この時間を徹底的に削らなければならないということは明らかでした。

そこで、Atlassian Cloud Premiumを採用しました。パフォーマンスが自動でアップグレードされ、アップタイムが保証されただけではありません。そこには、セキュリティチームとDevOpsチームとをつなぎ、冗長なセキュリティプロセスを削るにあたって有効なツールも存在していました。

Domino'sのシニアアプリケーションセキュリティエンジニア、Michael Sheppard氏は以下のように述べています。

“ 弊社の開発者が、コラボレーションを行ったり、要件を記載するにあたりConfluenceを愛用していることを知ったのです。セキュリティチームは、すでにうまく機能しているワークフローに合流しただけです。数分かけてフォームに入力すると、その約4分後には対応するJiraセキュリティ要件チケットが返ってきます。かつてミーティングやレビューで20時間以上要していたプロセスが、今はほんの数分で済むようになりました。ソフトウェア開発で起こりがちなセキュリティ面の難題でしたが、このアプリで解決することができました。



Domino's

業界
サービス

場所
ミシガン州アナーバー

製品
Jira Software
Jira Service Management
Confluence

Marketplaceアプリ
Marketplaceアプリ
Splunk for Jira Forty8Fifty Labs
Forms for Confluence
Scriptrunner for Jira
Zephyr for Jira



理由 #4

クラウドで生産性を向上

企業が生産性の向上を図ろうとする時、その方法は1つだけではありません。

最高の人材を雇用すること、(トップフォーマーは8倍の生産性を発揮します)あるいは従業員のエンゲージメントを高めるという方法もあります。(従業員のエンゲージメントが高いと、生産性は17%向上します)作業の邪魔になる要素を減らす、会議を最小限にする、**心理的安全**を推進する、ほかには**オフィススペースの再設計**も、生産性を押し上げるにあたって有効かもしれません。

クラウドへ移行するというアイデアもあります。

Office 365による調査では、IT専門家のうち約80%が、クラウドへの移行によって生産性が向上したと述べていることがわかりました。また、クラウドアプリを使ってリモートで働く従業員は、そうでない従業員と比べて13%高い生産性を発揮していると、スタンフォード大の研究から明らかになっています。

生産性の向上を図るにあたり、クラウドへの移行はそのスタート地点として最適でしょう。Gallupの調査によれば、生産性の低さによって企業には年間7兆ドルものコストが発生しています。スケジュール通りに開始できるプロジェクトが数件増えたとしても、クラウドへ移行する以上のコスト削減効果は期待できないことがわかります。

クラウドは、一体どのようにチームの生産性向上に寄与するのでしょうか。以下に主な要因を4つご紹介します。

クラウドでITチームの業務量を軽減

生産性向上におけるクラウドの貢献性について、最も明らかなのはITチームの業務量を軽減するという点です。

オンプレミスの環境では、サーバーのセットアップや部品の交換のほか、重大なインシデントへの対応や最新セキュリティの維持など、ITチームは長いタスクのリストを消化しなければなりません。クラウドであれば、そうしたタスクの多くをベンダーにアウトソースでき、ITチームはビジネスに最高の価値をもたらせるよう、その分の時間を然るべき業務にあてることができます。



Igloo Softwareのシニアツール管理者、James Seddon氏は、[クラウド移行に関する記事](#)の中で以下のように述べています。

“クラウドに移行してから、社内のITチケットは50%も減少しました。よく目にする内容は、バグへの対処や管理タスクのリクエストではなく、新しいアプリや機能を追加したいという希望です。これによって業務の遂行がよりスムーズになれば、顧客にさらなる価値を届けられるはずです。”

Airbnbのエンジニア担当副社長が、同社のアーキテクチャに関するインタビューの中で同様の思いを語りました。

“ エンジニアにとって大切なことは、弊社のビジネスにとって特有な業務にできる限り集中することです。インフラストラクチャの運用に多大な時間を使うべきではありません。

クラウドへの移行により、ITチームは技術面からビジネスに最高の価値をもたらすため、必要なタスクに集中することはもちろん、顧客や従業員にも目を配るようになります。さらには人材の採用にもよい効果が及びます。ITチームに必須となるスキルの数を減らし、広く浅いスキルではなく、深い専門性を持った人材の雇用が可能となるためです。

クラウドで集中領域と専門分野を取捨選択

ITチームのタスクを減らすことで得られる効果は、時間的制約からの解放だけではありません。タスクが減ることで精神的余裕も生まれるのです。こうした問題は認識が難しい上、生産性にも大きな影響を与えます。

言い換えれば、ITチームのタスクが多ければ多いほど、そうしたタスクで成果を出す可能性が低くなるということです。実際、一度に多くのことをこなそうとするとミスをする確率は50%上昇します。また、業務量の多い労働者ほど高いストレスレベルを示すものです。ストレスはエンゲージメントに悪影響を与え、生産性の低下をも招きます。マルチタスクはパフォ

ーマンスだけでなく、長期的には脳の健康やIQにもネガティブな影響を与えます。

多くのITチームが業務過多に陥っており、いつも色々なタスクに代わる代わる取り組んでいるとしましょう。一定のタスクに集中できる人々と比べた時、そうしたチームは生産性やクリエイティビティがはるかに低く、戦略的思考にも乏しい可能性があります。

ロードバランサー、サーバールームの温度調節システム、最新のセキュリティなどに専門知識を求めることをやめれば、精神的負担が軽減され、集中力と生産性ともに強化されたチームが誕生するかもしれません。274.aiで副社長兼情報システム部門グローバル部長を務めるKishore Ramachandran氏は、以下のように述べています。

“ 会社の強みは製品であり、ホスティングではありません。スケーラビリティについてはパートナーの力を借りることで対処したかったのです。

1. 使いやすいツールに投資すること 2. 心理的安全のある文化を育むこと 3. 技術面の負債を減らすこと——これらを達成すれば、企業の生産性は向上します。Googleも同様の見解を示しています。さらなるメリットは、こうしたアクションを実行していけばワークライフバランスが整い、従業員が燃え尽きてしまうリスクを減らすことができるという点です。優れたクラウドは、上記3つ全てを実現に導きます。

クラウドでIT以外のチームも負担が軽減

クラウドの恩恵を真っ先に受けるのはいつだってITチームだと単純に考えてしまいがちです。確かにITチームのタスクはクラウドによって大幅に減少しました。しかし、クラウドツールはマーケティングから人事、それにセールスなどのあらゆるチームの生産性をも向上させるという事実があります。

その理由のうち、主なものとして**自動化**が挙げられます。ワークフローやドキュメンテーション、そして基本的なタスクを**自動化**すると、業務量が減る以外にもメリットがあります。認識が難しいながらも重要な要素である精神的な余裕が生まれるほか、マルチタスクが減り、それぞれが自身の強みに集中して業務を進めることができます。

自動化が進むことによって重要度の高いタスクに注力することができますが、メリットはそれだけではなく、従業員の幸福度や生産性、定着率やエンゲージメントにも直接影響を与えます。結果として、**日々の仕事で強みを生かしている人は仕事に満足している可能性が6倍高い**と、**Gallupによる調査**で報告されています。そのような人は生産性も8%高く、離職する可能性は15%低いとされています。

クラウドによってIT以外のチームでも生産性の向上が見込めるわけですが、主な理由としてもう1つ挙げたいと思います。クラウドツールは小さなアップデートを定期的に行う傾向があるという点です。

アップデートで新機能がいくつも追加されると、年に2~4回はトレーニングを受ける必要がありましたが、クラウドツールにおいてはそのようなことはなく、より定期的な変更が少しずつ加えられていきます。小さなステップは大きな飛躍よりも受け入れやすく、**人の習慣に関する専門家によれば**、小さな変化は比較的負担になりにくいそうです。小さなステップを重ねる方式であれば、新しいことを学ぶのも苦ではなくなります。また、最新の機能やセキュリティにリリース直後からアクセスできるため、新たに加わったメリット全てを最大限に享受することができます。

クラウドでコラボレーションを促進

1カ所のオフィスに集まる場合でも、あるいはメンバーが世界中に分散している場合でも、クラウドはコラボレーションを飛躍的に進化させたと、**87%の企業リーダーが述べています**。これまでに目を通した調査の中で、これに異を唱えているものはありません。

コラボレーションはチームを**強く**し、エンゲージメントや生産性を高め、その結果高いパフォーマンスが発揮されます。コラボレーションを実行する企業は、**サイロ化した企業と比べてパフォーマンスの高さが5倍にもなる**といわれています。

クラウドによってお互いがつながりやすくなると、チーム間で透明性が高まり、コラボレーションが促進されます。設計、マーケティング、製品開発、そしてエンジニアリングといったあらゆるチームが同じシステムを使用するため、ほかのツールと同期が必要な場合でも接続が簡単です。

また、いうまでもありませんが、クラウドを使えば**あらゆるデバイスから**業務を進めることが可能となります。モバイルデバイスからでもシステムにアクセスできるため、複雑なVPNのセットアップを行う必要がなく、リモートでのコラボレーションもさらにやり易くなるのです。

Afterpayのエンタープライズテクノロジー部門グローバル部長、Simon Gowland氏は、以下のよう
に述べています。

“ 移行が完了すると、従業員は週末のうちに各自でモバイルアプリをダウンロードしていました。指示したわけではないのですが、モバイルでのワークフローを確認していたのです。**週末にラップトップを開かなくとも、迅速かつ効率的に滞りなく作業ができたようです。**

Googleによると、最高レベルのパフォーマンスを誇る開発チームはそうでないチームに比べ、クラウドを使用する確率が**24倍高い**といわれています。

ケーススタディ：Fair

企業として急速な成長を計画するのであれば、鍵となるのは生産性です。Fairの事例を見てみましょう。同社はAtlassian Cloud Premiumを採用し、**たった9ヵ月でチームを4倍にまで成長させました。**

カーリースを簡単でリーズナブルに、そしてディーラーではなく顧客中心のサービスの実現を目指し、Fairは交通業界を牽引しています。同社は組織の発展と効率性の向上を目的として、Atlassian Cloud Premiumを選択しました。その成果は大きく、しかもすぐに現れました。多くのメンバーが、生産性を25%～50%程度向上させたのです。

人事マネージャーのBrett Lakey氏は以下のように述べています。

“ 機器、座席、それにソフトウェアのアクセスまで、新入社員に必要なあらゆるものを、Jira Softwareチケットを一度発行するだけで手配することができるようになりました。**人事チームの中には、オンボーディングにかかる時間が半分に減ったという人もいます。**

ソフトウェアエンジニアのMichael Slocum氏が技術面においても称賛を贈りました。

“ バグに関するチケットが週に20～30件程度だった頃は、手動で対応することができていました。しかしチケットの数が1日あたり90件にまで増えると、全てに目を通すことができず、ましてや管理などしきれませんでした。現在はAPIを通してプログラムでアトラシアン製品を使用しており、チケットは大量にありますが、検索や整理、絞り込みが可能です。**勤務時間の25%を簡単に節約でき、情報をしっかりと整理できるようになりました。**



業界

自動車

場所

カリフォルニア州サンタモニカ

製品

Atlassian Cloud

Confluence Cloud

Jira Software Cloud

Jira Service Management Cloud

Marketplaceアプリ

ScriptRunner

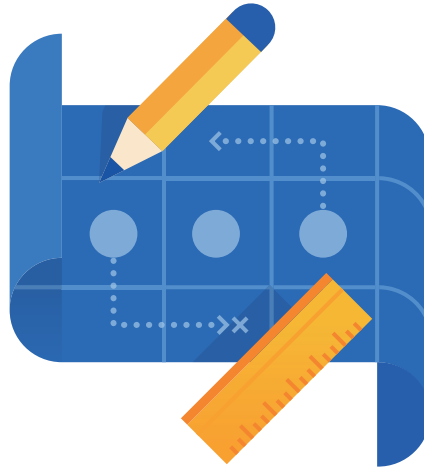
Automation for Jira

Portfolio for Jira

ProForma forms and templates

Toolkit Plugin for Jira

Jira Cloud for Google Sheets



理由 #5

クラウドでチームの将来性を確保

事例や数字を様々取り上げてきましたが、特に注目すべきものがあるとするならばこれではないでしょうか。

クラウドはもはや差別化の要因ではなく、長期的な成功を目指すにあたり、戦略上必要不可欠なものである、と [Benchmark Your Enterprise Cloud Adoption](#) と題した [Forrester](#) による報告書では言及されていますが、オンプレミスでのホストよりもクラウドソフトウェアを選択した顧客のうち、90%が同様の見解を述べています。

10年前、クラウドへの移行といえば時代の先を行く話題でした。しかし今は違います。サービスが常に動いていることが当たり前となった現在、クラウドを採用しなければ、顧客や従業員のニーズに対応し続けることができません。

74%の組織が、**クラウドによって競争における優位性を得ることができると述べています。**そして2020年末には、**企業のワークロードのうち83%がクラウドにあるとされています。**今この流れに乗っていないのであれば、すでに後れをとっているのかもしれない。競合他社が最新の機能あるいはセキュリティのアップデートを素早く利用できる一方、自社ではそれが叶っていないとしましょう。どちらが抜きんでるか、答えは明白です。

では、果たしてクラウドはチームの将来にどのように貢献するのでしょうか。以下に4点お伝えします。

クラウドで最新の機能に素早くアクセス。 セキュリティアップグレードやバグ修正にも即座に対応

ソフトウェアや処理能力をオンプレミスで管理していると、新しい機能が登場する度（通常は年2～4回）、手動でのアップグレードが必要となります。この時、ITチームが背負うコストは一目瞭然です。変更への対応に時間や予算を必要とするほか、度々ダウンタイムが発生してしまうとなると、組織全体に影響する可能性もあります。

また、発生するコストの中には見過ごしがちなものもあります。アップグレードが年に数回だけとなると、毎回新しい機能が多数追加されることとなります。つまり、**アップグレードの度に見たこともない機能の学習に時間をかけなければならないのです**。また、一度にあまり多くの機能が導入されると、バグが発生する可能性も大きくなります。こうしたバグが修正されるのは3～6ヵ月後、次のアップグレードの時かもしれません。

一方、クラウドにおけるリリースの規模はバグを1つ修正するか改良を加えるかという程度であり、バグが発生したとしても、一度に多くの人に影響されるリスクは高くありません。何かうまくいかなければ変更を元に戻すことが容易なため、影響を拡大させずに済むのです。次のリリース時まで3ヵ月間待つということもなく、準備ができ次第バグは修正されます。これは顧客からのフィードバックを即座に反映できるということでもあり、システムは継続的に向上していくというわけです。

また、新しい機能は定期的に小さなバッチで展開されるため、**変更についていくことは比較的容易で、年に何度も学習を繰り返す必要がありません**。最新の機能をすぐに使えることで競争力が維持されるという利点がありますが、それだけでなく、常に使い慣れたシステムを使用することでチームの機敏性が保たれるという効果も期待できます。

クラウドでクリエイティブかつ戦略的な業務を優先

ソフトウェアや各種製品をオンプレミスでホストしていると、ITチームはそこに多くの時間を費やすこととなります。ユーザーのことを考え、ストレージ、インベントリ、処理能力のキャパシティを広げようとしても、スケールに数日かかるかもしれません。数週間あるいは数カ月とまではいかなくとも、時間が費やされてしまうのです。アップグレードやセキュリティパッチの適用には、定期的に時間をかける必要があります、それらのスケジューリングと管理は精神的な負荷にもなります。また、重大なインシデントはもちろん、問題やセキュリティ侵害が発生すれば夜中に緊急対応が必要になる場合もあり、こうした負担はすべてITチームにのしかかってきます。

クラウドであれば、そうした余剰作業はすべてアウトソースすることとなります。つまり、バグの修正、問題の管理、そして重大なインシデントも、ベンダーが一手に引き受けてくれるのです。ITチームは、新しいサーバーの設置やトラブルシューティングといった煩わしく不毛とも思える作業を手放し、自社のビジネスにとって特有かつ必要不可欠な戦略的な仕事、あるいはクリエイティブな作業に集中することができます。サーバー、アップタイム、アップグレード、セキュリティパッチパッチなどの管理をITチームの業務から切り離し、クラウドベンダーに渡してしましましょう。そうすれば、ITチームはそれ以外のリクエストを迅速に処理できるようになり、さらにはトップ人材の離職を防ぐことにもつながるのではないのでしょうか。

おわかりかと思いますが、**多くのITチームはすでに業務を抱え過ぎています**。社内のサポートチームが毎月処理するチケットの数は平均500件弱で、各チケットへの対応に24時間以上を要していると、Zendeskによる調査で明らかになっています。Forbesの報告書では、過重労働が従業員、特にトップパフォーマーの離職理由第1位となっています。

継続的なリリースにより セキュリティも向上

開発者のうち48%が、**重要なセキュリティ課題に取り組む時間を確保できていない**と話しています。社内のチームに依存していると、セキュリティパッチの適用に予想以上に時間がかかる可能性が高いということを意味します。適切なクラウドベンダーを選べば、こうした問題は起こりません。セキュリティは何よりも優先され、パッチは利用可能になり次第リリースされます。

[アトラシアン](#)のクラウドセキュリティについて、[こちらから詳細をご覧になれます](#)。

クラウドでIT以外のチームも強化

オンプレミスでは、セキュリティアップグレードや新たな機能の追加、あるいは処理能力の強化など、いかなる変更であってもITチームでの対応が必要となります。こうなるとITチームに負担がかかるだけでなく、IT以外のチームにとっても業務が滞る要因となります。ワークフローやシステム、あるいはチームダイナミクスを素早く改善したいと考えても、なかなか進めることができないためです。

クラウドではセキュリティが即時に適用されるほか、[スケーリング](#)や機能アップグレードも自動で行われるため、チームは機敏に動くことができます。プロセスに変更を加え、ワークフローの改善につながる新たな機能を活用し、その恩恵を受けることができるのです。長い承認プロセスを経たり遅延に対処したりする必要はありません。もちろん、ITチームへ過度な負担がかかることもありません。

従業員やチームにおける士気の高さは、[業務のパフォーマンス](#)、[満足度](#)、そして[定着率](#)と強く関連しているという調査結果を度々目にします。つまり、クラウドの恩恵は波及効果が期待できるということです。仕事に対するモチベーションが上がると、チームに自律性が育ち、業務への満足度や会社へのロイヤリティが高まります。[大胆な目標に向かい](#)、自信を持ってクリエイティブなソリューションを考え出そうという気持ちにもつながっていくのです。

このトピックについて、Harvard Business Reviewが大規模な[研究](#)を独自に行いました。その結果をもとに、以下のように述べています。

“士気の高い従業員はパワフルで自信に満ちている傾向が強く、意義ある目標に向かって熱心に取り組み、それを達成するにあたってイニシアチブやクリエイティビティを発揮しています。こうした従業員はいつも自由に新しいアイデアを生み出します。そして、そのアイデアが尊重されるという確信も持っています。

クラウドでリモートワークや分散型チームをシンプルに

470万人のアメリカ人が、すでにリモートで働いています。オフィスワーカーのうち95%がリモートワークを希望しているほか、26%はリモートワークができないことを理由に離職しています。また、2030年までにオフィスでの勤務が時代遅れになると予測する人は、66%に上っています。そして新型コロナウイルス感染症の大流行から学んだように、リモートで働くことのできる能力が突如求められる場合もあるのです。



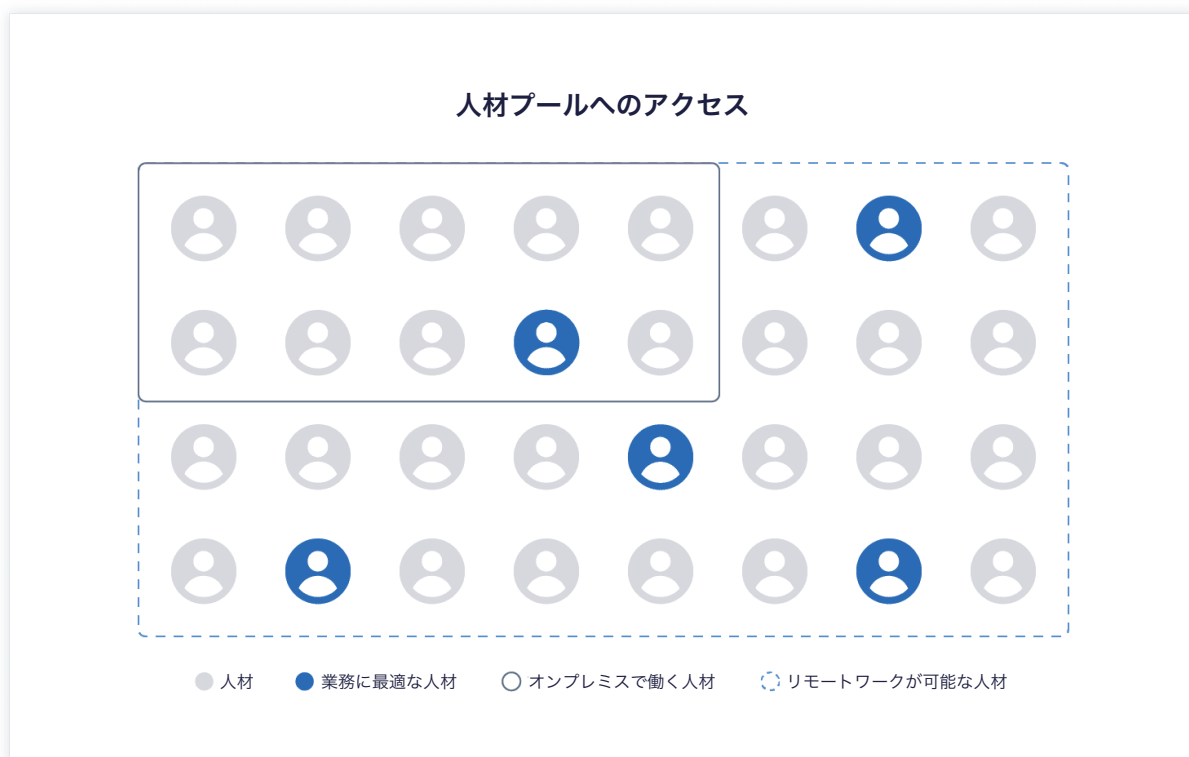
U.S. Census Bureauによるデータが上に示す通り、リモートワーカーの数は上昇傾向が続いています。そしてSlackによる最近の報告書によると、その後新型コロナの影響でさらに1,600万人のナレッジワーカーがホームオフィスを軸にし始め、この数字は25%近くも跳ね上がったということです。

依然としてオンプレミスを全面採用している企業にとって、リモートワークは複雑です。オンプレミスのシステムであっても、リモートからアクセスすることは可能です。しかし外部からのアクセスを許容しながらセキュリティを維持するとなると、パスワード、ファイアウォール、VPN接続、そしてアーキテクチャ上の制限など、様々な要素が複雑に絡み合うのです。

これに対してクラウドは、インターネット接続があれば場所を問わず即座にアクセスできるソリューションです。また、クラウドはリモートワークを念頭に置いているため、**セキュリティ環境**がすでに構築されています。調査に応じた企業のうち94%が、クラウドへの移行後**セキュリティが強化された**と答えた理由がここにあるのでしょう。

さらなるメリットとして挙げられるのが、フルリモートであっても緊急対応であっても、リモートで働けるようになると、分散型のチームに対しても手厚いサポートが可能になるという点です。

分散型のチームやリモートワークが機能すると、危機管理の側面以外にも大きなメリットが生まれます。人材を確保しやすくなるのです。地理的な要素のほかにも、障がいを持っている、あるいは高齢の親や病気の子どもの世話をしなければならないなど、様々な理由でリモートワークが必要な人も、採用対象として考慮することができるためです。



ケーススタディ：InVision

クラウドによって競争力が増したと話す企業の割合は74%に上りますが、InVisionもそのうちの1社です。

500万を超えるユーザー、そして800名の従業員を擁し、企業価値は20億ドルを誇ります。そんな企業がオフィスを持っていないと知ったら、驚かれるかもしれません。数十億ドル規模のビジネスが、全面リモートで動いているのです。

フルリモートでビジネスを動かすにあたり、最大の課題は従業員全員のつながりを保つことでした。そのため、Atlassian Cloudがチームのコラボレーションや相互接続を目的として作られていると知った時、InVisionのBizTech IT部門ディレクター、Wendy Stockholm氏はいたく感激したといいます。

“もともとリモートワークでは、必要な情報を持っている人を捕まえないといけない、あるいは正しいデータが格納されているツールを特定しなければならないという状況が当たり前でした。しかし、Atlassian Cloudを使って全てを集約したことで、今は1つの仮想空間が出来上がっており、各部門が物理的に体现されているという感覚もある程です。人に頼るのではなく、この空間に知見やデータ蓄積するようにしています。これによって連携が保たれ、集中力を持続させながら効率的に業務を進めることができるようになりました。齟齬が生まれたり混乱が起きたりする場面が減り、可視性の向上やレポーティング、そして業務の合理化に大きな効果をもたらしました。



業界

ソフトウェアおよびデザイン

場所

世界中

企業規模

従業員800名

製品

Jira Software Cloud

Jira Service Management Cloud

Confluence Cloud

Trello

統合

Jira for Slack

InVision for Confluence

Confluence Cloud for Slack

クラウド移行戦略を計画

収益の増加、ITサービスのスピードアップ、素早いスケーリングを実現し、同時にITチームを時間の制約から解放し、持続可能性の高いビジネスを行っていきたいという希望をお持ちではありませんか。また拡大をつづけている広大なタレントプールについても魅力的だとお考えでしょうか。この中に1つでもほしい要素があるならば、クラウドを検討する時が来ているということです。もしこうした利点全てを手に入れたいと願うのであれば、今こそ移行に向けて戦略的に計画を練るタイミングです。

移行を決めたら、まず何をすべきでしょうか。何を計画し、何を決めればよいのでしょうか。

答えは、**クラウドへの移行に向けて戦略を練る**ことです。クラウドへの移行を成功させるために、計画、評価、テストを着実に進める必要があります。

移行を成功に導くための土台作りを開始するにあたり、その方法を6つお伝えします。

クラウドファーストの考えを広め、ステークホルダーの合意を得る

企業文化に切り込まずに技術面だけを変えようとしても、大概は失敗に終わるでしょう。ですから、クラウドへの移行を目指す時はいつでも、最初にやるべきは**ステークホルダーの合意を得ること**、そしてクラウドファーストの考えをチームに広めることです。

まずはクラウドのメリットを示しましょう。自社の全体目標に対してだけでなく、従業員それぞれの目標に対するメリットです。クラウドが導入されたら何が楽になるのだろうか、チームの目標は達成しやすくなるのだろうか、クラウドを導入するとなぜ透明性が高まり、コミュニケーションやコラボレーションが促進されるのだろうか、といった問いに答えていきます。キャリアアップを考える時、あるいは会社としての貢献を考える時、チームにとってクラウドへの移行がどのように生きてくるのだろうかといった疑問を抱く人もいるかもしれません。

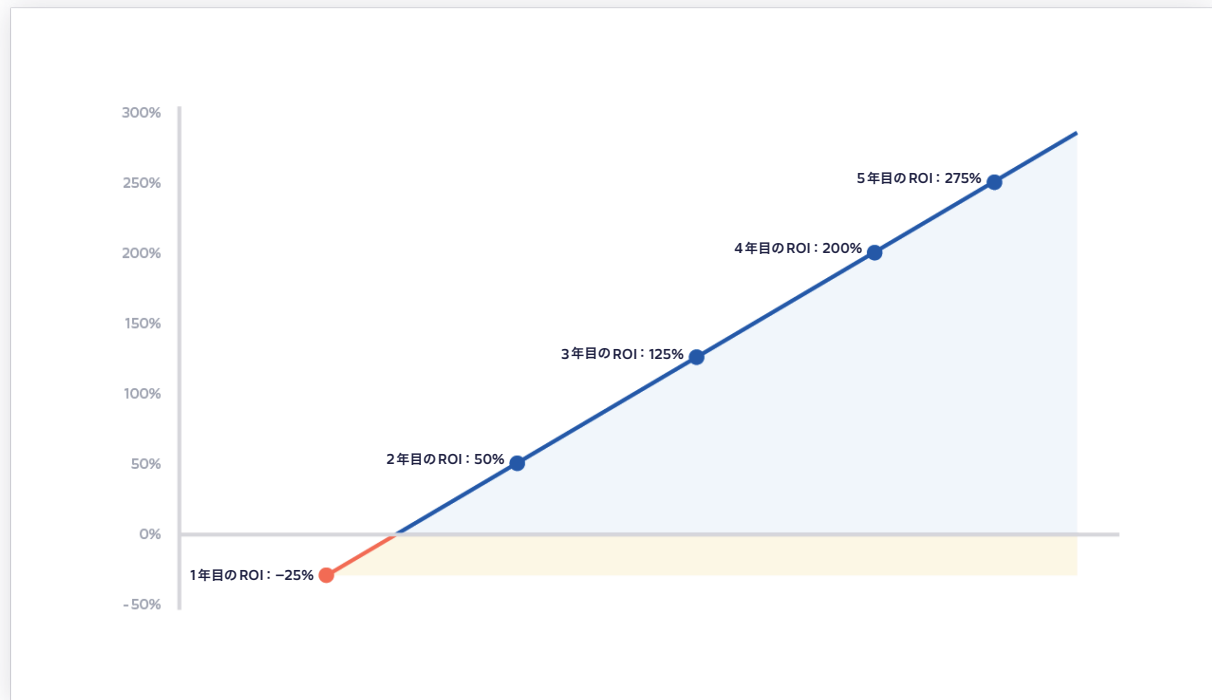
合意を得たいとお考えの際は、このホワイトペーパーのデータを是非ご活用ください。

移行のコストを計算する

切り替えを行う前に、クラウドへの移行によってコストがいくらかかりそうなのか、そしてどの程度の削減効果が見込めるのかについて、実際の金額を知っておくことが重要です。[18ページ](#)の方程式を使い、今発生するコストはいくらか、期待できるROIは何%か、そしてそれはいつ頃実現するのかを把握しましょう。ステークホルダーとのミーティングではこうした計算結果をストレートに伝えてみてください。

多くのケースでの移行コストを見ると、本当の長期的節約効果が見え始めるまで1～2年はかかるだろうということがわかります。戦略とは将来を見据え、短期的な利益よりも長期的な価値を選択することです。試算をすれば、これが反映された結果が出るのではないのでしょうか。

18 ページで計算した複数年に渡る ROI の変化 (グラフ) :



何から始めるべきかお悩みでしょうか？ クラウドによる価値あるコスト削減について見積もりを希望される場合は、アトラシアンソリューションパートナーまでお問い合わせください。

ニーズを評価し、適切なテクノロジーを選択する

お持ちのデータの量はどの程度ですか？ ユーザーは何人いますか？ チームはどんなツールや機能が必要としていますか？ こうした問いへの答えを早い段階で用意しておけば、適切なツール、適切なベンダーを選択する準備も整っていきます。

また、これは複雑さを解消できる場所を探る機会でもあります。実際には必要のないデータを保存していないでしょうか？ カスタムワークフローを標準化して、ものごとをシンプルにできないでしょうか？

クラウドはリーズナブルかつ将来に有効なソリューションであり、移行を実現すれば、機敏性の高いスケーラブルなテクノロジーの恩恵を受けることができます。しかし、移行はプロセスやデータのサイズ、ワークフローを見直し、生産性や収益を向上させる機会であることも忘れないでください。

移行の方法を選ぶ

オンプレミスからクラウドへ移行する方法は、1つだけではありません。自社にとって「正しい」方法は、組織の規模、移行するデータの量、新たなクラウドシステムを多用することになるチームなど、いくつかの要素によって変わってきます。

最も一般的な移行戦略は3つあり、それぞれLift and Shift (オンプレミスにあるシステムを全て移行する)、Start Fresh (クラウドに改めてシステムを構築する)、Optimize and Shift (システムを最適化してから移行する)として知られています。自社にとってどの方法が最適なのか、開始前に把握しておくことが移行をスムーズに進める秘訣です。



クラウドへの段階的な移行計画にご関心をお持ちでしたらアトラシアンのリソリューションパートナーまでお問い合わせください。個別でサポートいたします。

今のうちに定期的な見直しを予定する

テクノロジーを取り巻く環境は移り変わりが激しいため、適切なソリューションを見つけたらそれで終わりというわけにはいきません。最前線を走るチームは、目標とそれをサポートするテクノロジーについて、次に挙げるような問いに自問自答しながら定期的に見直し行っています。

- ものごとを前に進めるために、より優れた方法はないだろうか？
- ビジネスの成果を最大限に引き出すにあたり、必要な機能やアップグレードがあるだろうか？
- 過去3ヵ月、6ヵ月、あるいは1年の間に、戦略やツールに影響を与えうる変化があっただろうか？

一度戦略を実行してしまうと、それ以降見直しを忘れてしまいがちです。そうならないためには、実行前の段階で定期的な見直しを予定しておくことが最善の方法なのです。

クラウドの管理に明確な役割と責任を置く

自社で行っていた手作業の大部分がベンダーに渡ると、あとはベンダーがあらゆることに対応してくれると思ってしまうがちです。チームにクラウドの管理に注視する役割を与えておくのが賢明なアプローチでしょう。例えば意思決定者や管理者などは役割と責任の範囲を明確にしておく必要があります。

結局のところ、自社のニーズは時間の経過とともに変化する可能性があります。ベンダーが提供するサービスも変わるかもしれません。ビジネスにおけるニーズや課題について、自社のチームはベンダーよりもずっと深く理解しているはずで、当事者であるという意識を明確に持っているからこそ、使用するアプリや標準化すべきワークフローなど、あらゆる事柄についてチームとして決断し、前に進むことができます。

また、移行サービス専門のソリューションパートナーと連携するという方法もご検討ください。クラウド移行からアジャイルプロセス、クラウドにおけるガバナンスまで、あらゆるご相談をお待ちしております。

ツールがどのように使われているのか、誰が何をしているのか、提供されているサービスとチームが活用しているサービスにどのようなギャップがあるのか——このような点を明確にするため、クラウドベンダーには透明性および可視性が求められます。ベンダーがこうした役割を果たしていくためにも、チームがしっかりとクラウドに目を向けている必要があります。また、セキュリティやコンプライアンスの面でも、採用するクラウドサービスが要件を満たしているかどうかを理解しておかなければなりません。時間とともに要件が変わる場合は、ベンダーとの話し合いが必要となります。



まとめ：企業がクラウドへ移行すべき理由

クラウド移行のメリットをまとめて一覧で見てください。チームとの共有にお使いください。

収益

Dellによれば、クラウドモビリティに投資する企業は最大53%速く収益の増加を実現しているということです。オンプレミスではセットアップにかかる高額なコストと継続的な内部サポートが必要とされていたわけですが、その削減分を織り込まなくても、こうした結果が出ています。

機敏性

クラウド移行に踏み切る最大の理由のうちの1つとして、専門家の65%がビジネスのニーズに素早く応えられるという点を挙げています。企業規模が大きくなればなるほど、スピードが重要な役割を果たします。従業員の数が1,000人を超える企業のうち76%が、ITサービスのスピードアップを目的としてクラウドを採用したと述べています。

持続可能性

ある調査では、クラウドはオンプレミスと比べて最大98%環境に優しいとされています。クラウドは持続可能性を重視する企業のための選択肢でもあるのです。

スケーラビリティ

オンプレミスでスケーリングする場合、新しいサーバーを購入・設置しなければならないため、高額な費用が発生する上に時間もかかります。通常、クラウドでのスケーリングは柔軟性においてもスピードにおいてもオンプレミスに勝ります。

時間の節約

インフラストラクチャやアーキテクチャに注力するのではなく、ITチームはより高い目線からビジネスをサポートすることに集中することができます。

手動のアップグレードが不要

優れたクラウドソリューションでは、素早く自動でアップグレードが行われるため、特にセキュリティ面で大きなメリットがあります。

リモートワークと分散型チーム

470万人のアメリカ人がすでにリモートで働いており、オフィスワーカーのうち95%がリモートワークを希望しています。オンプレミスとは異なり、クラウドは分散型チームやリモートワークを想定して誕生したソリューションです。インターネット接続があれば、場所を問わず安全にアクセスすることができます。



まだ移行していないのなら…今こそ決断の時です

最高のパフォーマンスを誇るチームはそうでないチームに比べ、クラウドを使用している確率が24倍高いとされています。オンプレミスに留まるということは、まさにビジネスで後れをとるということです。

収益を増やし、スピードや生産性、およびスケーラビリティを向上させ、将来に渡ってビジネスを守る——クラウドに移行した瞬間にこれらが叶うわけではありません。しかし、移行にかけた時間やコストに対し、長期的に見込めるリターンは大きいのです。

チームの規模も、あるいは成長フェーズのどこにいるかも問いません。アトラシアンには、柔軟なプランとクラウドで使えるツールがあります。追いつくだけで満足せず、トップへと躍り出しましょう。

クラウドの選択肢および柔軟性

無料版	スタンダード版	プレミアム版	エンタープライズ版
10人未満のユーザー	10人以上のユーザー すべてのクラウド機能	スタンダード版+ 無制限のストレージ 99.9%保証のSLA プレミアムサポート IP許可リスト サンドボックス	プレミアム版+ 無制限のインスタンス 99.95%保証のSLA データの保管場所 エンタープライズサンド ボックス バンドルリリース エンタープライズサポート テクニカルアドバイザー Atlassian Access含む

Atlassian Access
すべての製品&プランを一元管理

アトラシアンは10名以下のチームに対し、最も人気の高い製品を**完全無償**で提供しています。可能性を目覚めさせ、スタートアップからエンタープライズへと成長を後押ししたいと考えているからです。

Atlassian Cloud Premiumでは、**高度な機能**に加え、**99.9%のアップタイムを保証するSLA**、**無制限のストレージ**、そして**Premiumサポート**によって**信頼性の高いスケーリング**を提供しており、安心してご利用いただけます。また、クラウドのユーザーが101人を超える企業の場合はボリュームディスカウントが適用されます。

そして、Cloud Enterprise プランはまもなく、Premium と Atlassian Access のメリットをすべて取り入れ、データ格納場所の制御、無制限のユーザーとインスタンス、サンドボックス、スケジュールされたリリーストラックなどの新機能が追加されます。

移行をご検討されていますか？ 既存サーバーやデータセンターをご利用中のお客様は、自身で管理している既存インスタンスのサイズと期間に合わせた**無料のクラウド移行ライセンス**を最大12ヶ月までご利用いただけます。チームの業務を中断することなく、Cloud Standard または Premium の検討、機能性の評価、無料の長期移行が可能です。クレジットカードも不要です。

[クラウド移行の無料トライアルはこちら](#)

今すぐ始める

🔍 さらに掘り下げたい方はこちら

<https://www.atlassian.com/ja/migration/cloud>

📍 下記の問い合わせフォームよりお問い合わせください。

<https://www.atlassian.com/ja/company/contact/japan>

